

ブロードウェイ・ミュージカル《マイ・フェア・レディ》に関する一考察
—イライザの演唱を探る—

A consideration on a Broadway musical “My Fair Lady”
:Focusing on performance of Eliza.

音楽文化研究科 音楽表現専攻 07-1011 柏原 美緒

本研究の目的は、ブロードウェイ・ミュージカル《マイ・フェア・レディ》のヒロイン、イライザの演唱を探ることである。

第1章では、ミュージカル史における本作品の位置付けを、ロングラン記録を基に調査し、作品の背景とストーリーを確認した。その結果、数あるミュージカル作品の中でとりわけ注目すべき人気作品の一つであることがわかり、その人気の一要因として、イライザが下町の花売り娘から淑女に変身を遂げていく、シンデレラ・ストーリー（サクセス・ストーリー）が巧みに描かれていることが読み取れた。

第2章では、第1章で導き出されたことを踏まえ、イライザの演唱について探るため、音楽がイライザの変化をどのように表現しているか、音域と声という二つの項目から分析した。まず第1節ではイライザの各ナンバーの音高と使用回数、及びその音の拍数を楽譜上から調べ、音域に変化があるかどうかを考察した。その結果、約2オクターブの音域をもつイライザであるが、コックニー訛りで歌うナンバー（花売り娘）の音域の方が低めで、低音の使用回数が多く、使用音符の長さは比較的短かった。一方、標準的な発音で歌うナンバー（淑女）の音域は高めで、高音の使用も多く、長めの音符が使用されていた。つまり、低く短い音から高く長い音へという音の変化は、花売り娘から淑女へと成長を遂げたイライザの変化と対応していることがわかった。

第2節では、イライザの表現に相応しい声を探るために、3人の演奏家による演奏の聴き比べを行なった。程度の差はあるが、3人とも、音の高さや長さに応じて頭声、胸声、中声（頭声と胸声が混ざった声）の少なくとも3種類の声を使い分けて歌っていた。そして、花売り娘（コックニー訛り）の時には頭声が少なく胸声が多用され、淑女（標準的な発音）になってからは、頭声が多用されており、イライザの成長によって発声を使い分けていることが聴き取れた。イライザの演唱には、音の高低と表現内容に即して複数種類の声を使い分けることが望ましいと考えられる。